

公益財団法人 福岡アジア都市研究所 都市政策資料室
URC資料室だより NO. 122 平成31年2月号



◆URC資料室ニュース

平成30年度 第4回 ナレッジコミュニティ

『「世界・アジアの中の福岡」を振り返り、これからを考える』を開催します。

昨年8月、当研究所の前身である財団法人福岡都市科学研究所の設立から30周年を迎えました。そこで、今年度のナレッジコミュニティはこれを記念し、福岡市のこれまでの30年の変化を様々な切り口で振り返るシリーズを、4回に分けて行っております。

シリーズの締めくくりは、福岡市の国際化について元URC主任研究員山下永子さんにご講演いただきます。

世界で最も早く「アジアの創造的知」に着目した都市・福岡。グローバル時代にますます「都市」への注目が集まってきている今日、福岡市は「国際」という枠組みを超えた次なるステージに立ちつつあります。

福岡のこれからの戦略について、これまでの取組みを振り返りながら、一緒に考えていきましょう。

【日 時】平成31年3月11日(月)

15:00~16:30 講演・意見交換

【会 場】福岡アジア都市研究所 会議室

福岡市中央区天神1-10-1 福岡市役所北別館6階

【定 員】30名 ※先着順受付

【お申込み】EメールまたはFAXで、①氏名・②所属・③電話番号・④Eメールアドレスをご記入のうえ、下記連絡先までお申し込み下さい。

(メール件名:平成30年度 第4回 URC ナレッジコミュニティ参加希望)

E-Mail : library@urc.or.jp Fax : 092-733-5680

* ご不明な点は092-733-5707までお尋ねください。

(山崎三枝 司書)

◆URCニュース

① 「Evolution Championship Series Japan 2019

(通称: EVO Japan 2019)」が開催されます。

2018年の流行語大賞にノミネートされた「eスポーツ」。聞いたことがあるという方もいらっしゃると思います。eスポーツは家庭用ゲーム機、パソコン、スマートフォンなどのデジタルゲームを対戦形式で行うものの総称です。米国や中国、韓国ではプロゲーマーと呼ばれる職業が成立し、数億円の賞金が懸かった大会もが開催されています。

日本でもようやく2018年12月に1億円を超える賞金

付きの大会が開催されました。

そしてついに福岡でも世界的なeスポーツ大会が開催されます。米国ラスベガスで開催している格



闘ゲームの世界カップともいえる「Evolution Championship Series Japan 2019 (通称: EVO Japan 2019)」が2月15日(金)から17日(日)まで福岡国際センターで行われます。

格闘ゲームはその名の通り格闘技をベースとしたゲームで、練習した技を駆使し、相手を倒すものでeスポーツの世界では日本人が最も得意とする種目です。東京以外では初めての開催とあり、福岡でも盛り上がりを見せています。

URCでは、「eスポーツ」の取組み可能性について自主研究を行っています。EVO JAPANの開催の効果について研究を深めていく予定です。



写真のご提供: EVO Japan 2019 実行委員会
(中島賢一 調整係長)

②研究紀要「都市政策研究」第20号の発行と第21号投稿論文の募集について

研究紀要「都市政策研究 第20号」を発行しましたので、お知らせ致します。閲覧をご希望の方は、URC 都市政策資料室まで是非お越し下さい。あわせて、URC ホームページでも公開しています。

また、「都市政策研究 第21号」に掲載する投稿論文を募集しています。論文の内容は、都市政策に関連する研究成果をまとめたものとし、特に、福岡市の都市政策に対する何らかの提言的な内容を含むことが望ましく、新規性または有用性のあるもので、原則として未発表のものに限ります。

投稿期限は、査読を要する論文は2019年8月31日、査読を要しない論文は2019年9月30日です。投稿資格

は、原則として賛助会員、福岡市職員、及び当研究所職員ですが、大学の研究者等で編集委員会が認める場合はこの限りではありません。

投稿要領は当研究所ホームページに掲載しています。なお、投稿を検討・希望される場合は、6月末日までにご連絡をお願いします。

また、皆様のお知り合いやお近くに論文を発表されたい方や、興味がありそうな方がいらっしゃいましたら、ぜひご案内ください。投稿をお待ちしております。

【専用メールアドレス: toshiseisaku@urc.or.jp】

(山本美香 主任研究員)

③福岡市国際視察研修受入報告

2019年1月分の国際視察研修について未現在、韓国から7件のお問い合わせがありました。その内訳は受入済み6件(113名)先方の都合によるキャンセル1件です。

視察研修の内容は、ペットボトルやビンなどの資源活用に関する取組み1件(14名)、ごみ焼却・処理施設の視察1件(18名)、市民福祉施設に関する取組み4件(81名)でした。

なお、3月末まで韓国とタイから2月1日現在すでに5件(146名)の予定が入っており、市民福祉に関する取組み(3件56名)、都市計画・公営住宅・緑化政策に関する取組み(1件72名)、消防・防災に関する取組み(1件18名)に関する視察研修を行う予定です。

視察研修後に実施したアンケート調査によると、福岡市

において超高齢社会に向けた日本の取組みを学ぼうとするニーズが多い状況です。

2月予定のタイからの大型訪問団は福岡市の都市計画について研修

受けます。福岡市の先進的な都市景観に関する取組みなどを学ぼうとするニーズもこれから高まっていくと思われます。

写真:URC撮影(李英雄 国際視察研修担当)



韓国:大同大学校訪問団

◆今月のおすすめ:「新建築 2018年11月別冊/臨海住宅地の誕生 福岡市のシーサイドももちとアイランドシティを通じて考える」(新建築社 2018.11 発行)

インターネットで「福岡市」と画像検索すると、ドーム、ホテル、タワーとシーサイドももちの風景がトップに上がってきます。また、飛行機で福岡へ近づくと見えてくるのは開発中のアイランドシティ。いまや見慣れた風景ですが、その開発過程には先人たちの様々な挑戦が

ありました。

本書は、建築雑誌の別冊で、「シーサイドももちとアイランドシティ」という福岡市の湾岸地域における住宅地開発の過程と成果を概観し、住宅地のあり方を考える特集号です。全5章から構成されており、第1部は福岡の市

域や土地利用の変遷、第2部は日本の主な近代住宅地の特徴、そして、第3部・第4部でそれぞれシーサイドももちとアイランドシティの開発過程がまとめられ、第5章で「住宅地の未来を語る」をテーマに8名の専門家のコラムが並ぶ構成となっています。

シーサイドももちは、1989年(平成元年)にアジア太平洋博覧会でまちびらきし、海とのつながりを意識した実験都市として形成されました。本書では戦略的な都市構造、デザインコード、まちづくりプランナーとして活躍した都市計画家・水谷頴介と建築家・宮脇檀のデザイン思想などが紹介されています。中には、当時としては先見性の高いマーケティングと販売戦略も掲載されています。

一方で、アイランドシティは、2005年に全国都市緑化ふくおかフェア(アイランド花どんたく)でまちびらきし、現在も開発途上にありますが、約9000人が暮らすま

ちに成長しています。本書では、シーサイドももちとは異なる、島形式の個性的なまちづくりを紹介しています。

臨海部の大部分が「人や物を運ぶ港」に覆われ、街中では海との接点を感じにくい福岡ですが、両住宅地は「人が暮らす港」として、海と人々の暮らしをつなぎ、海を生かした都市イメージを担っています。それぞれ、まちびらきから30年と14年。平成が終わろうとする時に、平成の福岡を象徴する住宅地開発が取りまとめられたことに時代の移り変わりを感じます。現在も福岡市ではウォーターフロント地区の再整備の検討が進み、先月には箱崎ふ頭を新たに埋め立てる検討を始めたことと発表されました。福岡の臨海部は、住宅地はどのようにあるべきか。これまでの挑戦を学び、未来への示唆を得る、おすすめの一冊です。

(片田江由佳 FDC マネージャー)

◆所員雑感：友好都市「中国・広州市」の魅力と可能性に迫る！

～「チャイナ☆沙龍(サロン)」開催～

「チャイナ☆沙龍(サロン)」は、URC資料室2017年度第1回ナレッジコミュニティ開催を契機に、2017年11月に発足しました。福岡市の職員をはじめ、中国に興味関心のある人々が集い、URC交流スペースなどで不定期に活動しています。

1月18日(金)開催のテーマは、常住人口約1450万人の巨大都市「広州市」。福岡市総務企画局 奥田聖氏による講義は、現在の中国を取り巻く経済情勢、広州の魅力、広州市と福岡市のつながり、今後の展望など多岐に渡り、20名の参加者は熱心に耳を傾けていました。

私自身は、1995年に出張で初めて広州市へ。朝食でいただいた海鮮粥の美味しさが今でも印象に残っています。二回目は、2010年に福岡広州ライチ倶楽部のライチ狩りツアーで広州市へ。南国特有の空気の中、もぎたてのライチの甘さと瑞々しさに感動するとともに、急ピッチで発展しつつある街の雰囲気を感じました。今年、福岡市との友好都市締結40周年を迎える「広州市」。是非

再び訪れてみたいと思っています。

「チャイナ☆沙龍(サロン)」開催を通して、様々な中国とご縁のある方々と

出逢うことができ、大変嬉しく思っています。サロン主催の奥田氏は、1月末より広州との経済交流促進のため、広州市に長期派遣されます。一時帰国にあわせ、今後も最新の中国事情などを共有できる機会を創っていかたと考えています。また、この機会に特別寄稿「友好都市・広州市の今、歴史、これから…」をお寄せくださいましたので、是非併せてお読みください！

写真提供(樋口淳子 国際視察研修担当)



◆特別寄稿 その1 「友好都市・広州市の今、歴史、これから…」

中国・広州市をご存知でしょうか？

広州市は中国の省別GDPトップに君臨する広東省の省都です。省内にはイノベーションで話題の深圳があり、その隣には香港、海を隔てて世界的観光都市・マカオがなっています。この辺りは近年「広東省・香港・マカオビックベイエリア経済圏」が打ち上げられて注目を集めているエリアであり、広州市はその中核的な役割を担っています。人口は約1450万人で九州全体とほぼ同じ。経済規模でも九州の4分の3程度にまで成長してきてい

ます。

福岡市は、その広州市と1979年に友好都市の締結をしました。今からちょうど40年前の出来事です。食の宝庫と評される福岡に対し、「食は広州に在り」という言葉で知られる広州。日本の玄関口として貿易で栄えた博多に対し、「南大門」と呼ばれ中国のインド・ヨーロッパ方面の貿易拠点であった広州。両地域ともに自動車産業が集積しているのも共通しており、福岡と広州が非常に近い歴史・文化、そして気質を持った都市だということが分

かります。

そんな両市の結びつきを辿ると、実は孫文が導いた「辛亥革命」と福岡の支援者たちとの友情にまでつながります。広州は孫文の活動拠点だった都市であり、友好都市締結をした当時の福岡市長の父親はその孫文を支えた一人でした。さらに友好都市締結の翌年には、福岡市動物園に広州から2頭のパンダがやってきて当時の福岡の子どもたちは大熱狂しました。お礼として福岡市が贈った中国初のジェットコースターは広州の子どもたちを大興奮させました。そんな記憶を持つ両市の子どもたちも、既に子どもや孫がいる世代になっています。一見すると遠く離れた両市ですが、その実、血の通った友情の歴史が脈々と受け継がれてきているのです。

そして、今年は記念すべき40周年。30周年の時点と

比べても、広州は更に経済発展し、大きく変化しました。そうした「広州の今」を福岡市民に知ってもらい、40年間で築かれてきた深い友好関係を活用して、より強い経済交流へと昇華させていきたい。そうした任務を背負って、私はこの度、広州へ派遣されることになりました。両市で長年続いている職員相互派遣の一環ですが、今後は現地でのビジネス交流サポートに重点を置くこととなります。私は、40年間築いてきたこの友好関係を、地域の先人たちが残してくれた財産だと考えています。「四十にして惑わず」と言いますが、その財産を後に続く世代に残していけるよう、惑わず精進したいと思います。

(チャイナ☆沙龍 (サロン) 主宰 奥田聖(福岡市総務企画局))

◆特別寄稿 その2 *一人一花の楽しみ* 第11回 2月「フラワーバレンタイン (世界で一番花を贈る日)」

福岡市民 157 万人が一花植えたら 157 万本の花溢れるフラワーシティになる。市長旗振りで始まった「一人一花運動」は2年目を迎えた。都心部街路は賑やかなフラワーロードに変身した。冬場に天神の街には色鮮やかな花が咲いている。観光客が福銀の花壇前で笑顔の写真を撮っている。市庁舎玄関オープントップバス花壇では、多くの人が花をバックに写真を撮るのも良く見る風景だ。思わず写真を撮りたくなる花風景を増やして、来訪者に喜んでもらう「花のおもてなし」も一人一花運動の大きな目的。美しいまちの花たちは住む人、働く人、訪れる人に喜ばれる笑顔の万能薬だと思う。「一過性の運動に終らぬよう10年計画で取り組み、多くの市民、企業さんと一緒に関わられるまちづくり事業にみんなで育てましょう！」と花の効果を目の当りに話す担当課長の笑顔も輝いていた。

そんな、2月の一花は花卉業界のフラワーバレンタイン(世界で一番花を贈る日)をご紹介したい。2月の国民的一大イベント、2月経済に欠かせないバレンタイン商戦に花卉業界が乗り出している。今年はポスターもコラボイベントもなかなかイケてる。中島美嘉の名曲「雪の華」から誕生した映画とのコラボで「雪の華」ブーケを贈ろうとプロモーションが進んでいる。1月19～21日の3日間は三越前でもフラワーバレンタインイベントが華やかに行われ、ライオン君も花アレンジされていた♪

フラワーバレンタインと云えば、赤いバラを連想するが、今年は「雪の華」ホワイトカラーのブーケが加わる。私の好きな色だ。緑にも似合う、早速作ってみよう。おっと、その前に1月31日は「愛妻の日」だそう

な、知らなかった。勝手に花を贈る日を決めて、「愛妻の日」とか「夫婦の日」「誕生の日」とか、「母の



日」以外にも「花を贈る日」を沢山作って、一人でも多くの人に「花」を身近に感じて貰う花文化の普及・定着を目論んでいる「花の国日本協議会」にいいね！をポチリ、FBでもシェアした。昨年は高島市長も参戦し、関係者のトークショーが市内のホテルで行われた。花文化の向上が「一人一花」効果の落とし処だと確信している。ともあれ、男性が花を持っている姿は素敵だ。ミスターフラワーバレンタインはサッカーの三浦カズさんとか、ポスターもかっこいい。そんな花の似合う男性が福岡にも沢山いて欲しいと願う。「一人一花」運動のブラッシュアップはプロモーション次第でダサくもかっこよくなる2年目。しっかりと踏ん張って、応援し、私たちも参戦していきたい。「一人一花」万歳！「フラワーバレンタイン」万歳！の2月が始まる。このコーナーの1年間のメは、「一花」紹介ではなく、「花業界」のイケてるムーブメントをエールでのご紹介としたい。2年目も引き続き、「一花」の魅力を微力ながらお伝えできればと…願う。

写真提供・執筆:

福博:花まち研究会 会員 きむらみえこ(環境演出家®)